矢吹 聡子（スクールリーダーシップ開発専攻）

なりたい自分と目指す夢

１．教育を考える一言

「東電についてどう思う？」

２．背景

これは私が大学三年生で避難所ボランティアを行っていた時に、そこに避難してきていた小学生の男の子に問い掛けられた言葉です。彼の故郷は福島県双葉町、父親は東電の社員。彼は原発事故の影響で、地元からの避難を余儀なくされ避難所で不自由な生活を送りつつも、ボランティアの私達とレクリエーションをする際には明るく屈託のない笑顔を見せる男の子でした。いたずら心の絶えない明るい彼が、とても真剣な表情で突然こう問い掛けてきたことが大変印象的でした。私は、返事に詰まりました。

３．考察

父親の勤務先である企業が原因で、生まれ故郷に住むことができなくなってしまったという彼の複雑な境遇、また連日のマスコミからの東電バッシングや世論など、様々な情報が頭の中に散らばり、結局私はこの問い掛けに上手く言葉を返すことができませんでした。そしてその後、どう彼に答えを返すべきだったのかと何度も何度も繰り返し考えましたが、当時の私の意識はデリケートなその質問にどういった答えを返すことがベストであったのかということにばかり向いてしまっていました。しかし、実際に彼に必要だったのはその一問への一答ではなく、彼の心に寄り添っていくことであったのだと、今となっては思います。

この経験から私は自分の至らなさを反省し、子どもの心に寄り添うことについて関心を抱くようになり、またそういった心の寄り添いのできる人物でありたいと思うようになりました。そして、カウンセリングや心理学を独学で学んだ後、更に深く専門的な知識をつけるために大学院へと進学しました。現在では、学校心理士の資格の習得も視野に入れて心理学やカウンセリングの授業を履修し、充実した学習をすることができています。

私は大学院卒業後はそれまでの学習を生かし、学校段階の中でもより一日の長い時間子どもたちに寄り添うことのできる小学校の教員になりたいと考えています。例え小さな悩みや葛藤にでも、子どもたちの些細な行動や一言から気付き、寄り添うことのできるような教員になりたいです。

私は彼のこの問いをきっかけに生まれた、なりたい自分と目指す夢に向かってこれからも勉学に努め、様々な経験を積んでいきたいと考えています。

引用参考文献

本田恵子『被災地の子どもの心に寄り添う―臨床心理学からのアドバイス』早稲田大学出版部、2012 年

松原達哉『カリキュラム入門』ぎょうせい、1988 年

庄司一子『事例から学ぶ　児童・生徒への指導と援助』ナカニシヤ出版、2012 年

「学校心理士」認定運営機構『学校心理士と学校心理学』北大路書房、2004 年